

近江ミッションと「ガリラヤ丸」伝道

奥村直彦

一、はじめに

二、「ガリラヤ丸」の建造と進水

(1) 湖西伝道への夢

(2) ハイド氏の寄付申出

(3) 「ガリラヤ丸」の建造と進水

三、「ガリラヤ丸」による伝道

(1) ビッケル船長と「福音丸」伝道

(2) 「ガリラヤ丸」による伝道

四、新「ガリラヤ丸」の建造とその後

(1) 新「ガリラヤ丸」の建造と伝道

(2) 新「ガリラヤ丸」の売却

(3) 「ガリラヤ丸」のその後

五、おわりに

一、はじめに

一九一〇年代から三〇年代（大正初期から昭和初期）にかけて、日本一の湖、琵琶湖上に優美な姿を浮かべ、ユニークな湖畔伝道を展開した「近江ミッション」の福音船 *gospel boat* 「ガリラヤ丸」*the Galilee Maru* のことを知る人は、年と共に少なくなりつつある。

本稿はその伝説的とも言える名前に比べて意外に知られていない「ガリラヤ丸」自身の生涯について明らかにすること、すなわちその船の計画から建造に至る経緯、進水の模様、船体の構造と要目、そしてこの「ガリラヤ丸」を用いて実施された「近江ミッション」（現・近江兄弟社）の湖畔伝道の模様と方法などを解明することを目的としている。特に当時の関係当局者以外には、今日までほとんど知られていなかったガリラヤ丸の売却に関する交渉の経緯と契約の内容、売却後の運命等について、今回新たに発見した第一次史料に基づいて解明したところに本研究の特色がある。後に述べるように、これまでガリラヤ丸についての記録は、出版物を通して公にされたもの以外には見出されていないからである。

なお近代日本のキリスト教受容過程においてガリラヤ丸の伝道が果たした役割と位置づけについては、本稿の記述の中で具体的に示されるが、終章において筆者の見解を明らかにするつもりである。また伝道船による伝道について扱う本稿では、その先駆者ビッケル船長と「福音丸」についても当然触れることになるが、それらとガリラヤ丸伝道との関係の究明及び両者の対比的な考察も若干試みたいと思う。

研究資料は、注記に示す通り、近江ミッションで出版された図書雑誌、特に『失敗者の自叙伝』、『近江の兄弟』、

『吉田悦蔵伝』及び『湖畔の声』、*The Oni Mustard Seed* 等の中の記事や報告を中心とし、それらを詳細に比較検証することによって事実の正確な把握につとめた。その作業によって例えばハイドによる寄付の経過などガリラヤ丸に関するこれまでの通説のあいまいな部分に光を当てたことも本稿の特色の一つである。また先述の通り、新発見の第一次史料、ハイドの手紙及びガリラヤ丸売却についての関係文書、書簡、メモ等も使用し、戦後のことについては、関係者からの聞き書き、関係会社への問い合わせを行い、その資料に拠った。これらは現在の段階で知り得た資料の一つの限度であると言える。なおビッケル船長と福音丸に関しては先行研究ならびに関係資料 GLEANINGS 等の助けによる。

本稿は筆者のヴォーリス研究の一部をなすものであるが、今日までの所、ガリラヤ丸とその伝道に関する先行研究はないと言つてよい。ヴォーリス研究における本研究の位置づけについても終章で述べることにしたい。

最後に、本研究が視野に入れる年代は、一九一〇年(明治四三)から一九四〇年(昭和一五)までのほぼ三十年間とし、戦後については関連部分に限って触れることを付言しておきたい。

二、「ガリラヤ丸」の建造と進水

(1) 湖西伝道への夢

W・メレル・ヴォーリス William Merrell Voies, 1880—1964 (一柳米来留) は、一九〇五年(明治三八)二月二日、滋賀県々立商業学校(現・滋賀県立八幡商業高等学校)英語教師として来任し、同年一〇月には同校内に基督教青年会(Y.M.C.A.)を結成、一九〇七年(明治四〇)二月一〇日には「八幡基督教青年会館」(Herbert Andrews Memorial Y.M.C.A.)を建設したが、そこを本拠にY.M.C.A.運動を展開しようとした矢先、その伝道活動のゆえに教師の職を

追われたのである。しかし彼は屈せずこの地に留まって近江の伝道教化を進め、一九一〇年(明治四三)「ヴォーリズ合名会社」を設立すると共に「近江基督教伝道団」(以下、近江ミッションという)を組織して「近江に神の国を」⁽¹⁾つくるといふヴィジョンの実現に乗り出した。これらの時期の状況については、これまでに明らかにしたいいくつかの拙稿論文等⁽²⁾に報告した通りである。

こうして湖東地方を中心に活発な伝道活動を展開する中で、ヴォーリズらの夢が西近江、すなわち湖西地方へと広がっていったのは自然の勢いであった。近江八幡の長命寺付近の湖岸、あるいは特に八幡山の頂に立つと、眼前に茫洋と横たわる琵琶湖の対岸には巨大な比良の連峰が横長に聳え、その山麓には左右(南北)に点々と続く湖西の町村が望見される。この孤立した未知の土地、未開拓の伝道地への夢が彼らの心を動かしたのである。⁽³⁾

一九一一年(明治四四)三月、ヴォーリズ、チャーピン、Lester Grover Chapin、ソーン兄弟、Fredrick & George Thomas、吉田悦蔵の五人は大津から琵琶湖の西岸を徒歩旅行で北上し、将来この地方へ福音を宣べ伝える下準備の調査を行った。以下ヴォーリズの INTO WEST OMI (西近江⁽⁴⁾)によって、その旅行の様子を見てみよう。

ヴォーリズらの一行は、道を歩きながら熱心にスケッチをし、写真をとり、村人に質問したりしたためにスパイとみなされて警察官の執問を受けたりしたが、人口千人から三千人の九つの町を含む合計五六の町村を旅行していった。その地域の全人口は三六、三七〇人に及んだが、右の九つの町を除くと一町村当りの平均人口は六五〇人という小さい町村ばかりであった。こうした人口分析の結果、湖西では志賀郡に人口が多いことが分り、まずそこに伝道所を置くことが考えられた。ヴォーリズはまたこの旅行を通じて、未だかつて福音が伝わったことがなく、それを受容し難いと思われる湖西北部に強く魅きつけられ、そこにも伝道所を置くことを決意したのである。それらは後になってそ

それ堅田基督教会館（堅田教会）、今津基督教会館（今津教会）として実現する。「伝道所を置き、常住の伝道者、伝道用の自転車、船が備えられれば、あとは根気と時間の問題である」とヴォーリズは記している。

彼らはまたこの旅行中、湖西地方の宗教事情を調査して、そこには一六もの寺があり、一ヶ寺におよそ三十四人が所属していると報告している。宗派に関しては、南部は天台宗、中部は浄土真宗、北部では禅宗が優勢であるが、天台宗は比叡山を中心とした密教、浄土真宗は一般に活動的で信者も多く壇家の結束も強い。ただこの真宗は阿弥陀仏の信仰によって容易に「救われる」ために個人の道徳との関わりが薄く、それが民衆に人気がある理由だとの観察を示し、他方、禅宗は前二者とは異質でむしろ道徳的であると記している。ちなみに彼らが旅行した町村にある寺の宗派は天台宗一四、浄土真宗六二、禅宗二二の分布であった。

ヴォーリズはまた神道の存在にも注目し、村人たちのシンクレティズム的混乱ぶりを指摘した上で「いったい寺や神社が人々に施しているものは何なのか」との疑問を自ら提出し、それは「未来への心配を楽にするのかも知れないが、未来に希望を与えるとは言えない。」と自答している。

この調査の結果、湖西の人々は純朴 genuine country folk であり、その純朴さの中に伝道の重点を置くべきではないかと悟ったヴォーリズらは、この湖西地方こそあのガリラヤにも似てキリストの来訪を待つ地であるとの認識に立ち、自ら「良きサマリヤ人」になる決意を固めた。ヴォーリズが後にこの夢を実現するゴスペルボートを「ガリラヤ丸」と命名したのは、ガリラヤ湖にちなんでの事であると同時に、その湖の西岸に位置するガリラヤ地方のことが念頭にあったからではないかと推測されるのである。

(2) ハイド氏の寄付申出

一九一三年(大正二)八月、米国カンザスシティで開かれた「海外伝道学生奉仕団」(Student Volunteer Movement for Foreign Mission)の大会に出席した吉田悦藏(1890—1942)は、ヴォーリズの紹介状を持ってA・A・ハイドに面会した。ハイドは「近頃メルルはどうしているか」と尋ね、病氣保養のためたまたま帰米していると知ると、二人で自分の別荘へ来るようにと誘った。

ハイデ (Albert Alexander Hyde, 1848—1935)⁽⁹⁾ は一八四八年三月、マサチューセッツ州リーに生まれた。一六歳の時志を立ててカンザス州レヴンワースに移ったが、そこはたまたま後にヴォーリズが生まれた町でもあった。二四歳の頃、同州ウィチタの銀行に勤め、不動産業で巨富を得たが地価暴落で大きな借財を負う身となった。ハイドは植物に興味があり、やがて⁽¹⁰⁾ 糸蘭から薬を取って石けんや咳止薬をつくる会社を起した。一八九〇年、彼はメンソレータムを發明したが、それは日本の製薬法を研究した結果、薄荷とペトロレイタムその他を化学的に調査して出来たものであった。一九〇六年には糸蘭会社をメンソレータム会社と改め、一九〇九年カナダ工場、一九一九年バッファロー工場を建設、のちにそれらをバッファローに統合、そこを本社工場として事業を進めた。「まず神の国と神の義とを求めなさい」という聖書の言葉はハイドの生活の中心基調であったし、所有物はすべて神からの預託によるもので自分はその執事であるとする彼の敬虔な信仰と生き方は、典型的なピューリタニズムのそれであって、同じピューリタンのヴォーリズにも大きな感化を与えたものと考えられる。ハイドは収入の十分の一を神の国に献げることを神に約束して事業を始め、遂には十分の九を献げるクリスチャン実業家となったのであるが、「人の生涯の美しさは彼の富から生ずるのではなく、彼の奉仕から生じるのである」⁽¹¹⁾ The beauty of this life springs not from his wealth but from his service と⁽¹²⁾ 彼の言葉は、その信仰と奉仕の生涯を物語っている。

ヴォーリズは滞米中の一九一〇年四月、フェルプス Gelen S. Phelps の薦めでシカゴでの信徒宣教会に出席、そこではじめて、外国伝道を支援する有力な信徒として知られていたハイドに出会い、さらに一九一三年には、四月二五日から二八日まで、カンザス州ウィチタのハイド家に滞在、ハイドからはじめて日本でのメンソレータム代理店の話をもちかけられている。⁽¹³⁾ ハイドが吉田に「メルルはどうしているか」とたずねたのには、そういう背景があったのである。

さて一九一三年八月、コロラド州グリーンウッドスプリングスの両親の下で休養中のヴォーリズは、吉田と共に先に述べたハイドの招きに応じてエステスパークの彼の山荘を訪れ、数日間滞在した。二人、特にハイドの人格に初めて接した吉田は、クリスチャン実業家としての体験談をきいて深い感銘を受けた。吉田の『近江の兄弟』⁽¹²⁾と『吉田悦蔵伝』⁽¹³⁾には、その帰り際にハイドが、お土産としてメンソレータム（現・メンターム）のサンプルを渡し、その日本での販売権を与えよう、また伝道用モーターボートを寄付しようと言いつつ出したように書かれているが、それは必ずしも史実に忠実な表現ではない。そこでしばらく、筆者の目に触れた限りの、ハイドからヴォーリズ宛の書簡によって、その間の状況を追ってみることにしたい。

まず一九一三年三月二〇日、ハイドは *The Omni Mustard-Seed* の記事でヴォーリズの帰米を知り、ぜひ自分の所へヴォーリズを会いに来させるようにとグリーンウッドスプリングスのヴォーリズの母親ジュリア Mrs. John Vorles に手紙を出し、⁽¹⁴⁾ ついで四月七日には、帰郷したヴォーリズに宛てて、息子のアレックスからヴォーリズに一〇〇ドル送金するように言ってきたが、それはヴォーリズとアレックスが会い、メンソール等の情報を得るためのヴォーリズの費用だと告げた上で、とにかく自分の所へ訪ねて来てほしいと書送っている。⁽¹⁵⁾ その後二人はハガキや電報等で連絡し合ひ、先に述べたように四月二五日から二八日までのヴォーリズのハイド家滞任が実現した訳である。そこではじめてメンソレータム代理店の話がなされたことは前に記した通りである。さてこの訪問直後、ヴォーリズが出した四月二十九日付の手紙に対し、ハイドは、寄付集めの状況をたずね、必要が満たされないなら助けようと申出ている。⁽¹⁶⁾ さらに十月二七日には、ニューヨークに戻ったヴォーリズにメンソールの相場下落を報じ、また日本での伝道事業の計画予算と寄付到達額を知らせるようにと書送っている。⁽¹⁷⁾ それに応えて、ヴォーリズは一月六日に、サナトリウム、幼稚園等と共に西近江の伝道センター設置の計画を挙げ、これは琵琶湖の全西岸に働く伝道基地であり、モーターボート

によって開拓されることになるだろうと述べている¹⁸。しかしこれらは三万ドルを超えるぼう大な予算を必要とする多様な計画であったため、ハイドは、同一三日付の返信で自分の経験から言うのだが、もっとよく考えるように、またプランが余り多岐 *multiform* にならないようにと忠告している¹⁹。

ハイドとヴォーリズとの交流と接渉はまだ続く訳であるが、右に見て来たところから考えて、少くともエステスパークの山荘でハイドが急にメンソレータムのことを言い出したり、モーターボートの寄付を申出たのでないことだけは明らかであろう。海外自給伝道に関心を持つクリスチャン実業家としてのハイドは、早くからヴォーリズの事業に深い関心を寄せ、日本のメンソールを原料とするメンソレータムの市場を日本に拡げることによってヴォーリズのミッションを援助することを考えていたのである。一九一二年七月号「マスタードシード」の BEFORE AND AFTER (先かあとか) という論稿の中で、ヴォーリズが「人は誰でも勝利者の友になりたがり、何かを成し遂げた人には金を貸そうとするが、本当にそれを必要としている人には中々貸そうとはしない。しかし世の中には必要のある所に助けを出し、車が丘の頂上に到達する前に肩を貸そうとする人も少しはいるのだ²⁰」と述べて近江ミッションへの寄付をアピールしたあと、それらの真の寄付者の一人として「琵琶湖の福音船への寄付もただ一人の人のプロジエクトなのだ²¹」(傍点筆者) という表現でハイドのことを紹介していることからそれは明らかである。またヴォーリズは同じ論稿の中で、近江ミッションの今後の計画としてサナトリウムや学校の建設等七項目を挙げたあと、次のように述べているが、それは先の十一月六日付ハイド宛書簡の内容と符合する。(傍点筆者)

それらの活動(注・右の七項目をさす)が加えられ、また湖畔のすべの町へ到達できるゴスペルボートが出来れば、我々近江ミッションは、適当な期間の内に全近江の人々に福音をもたらすことができることを、支持者の皆さんに約束できるところまで前進するだろう²²。

さらに注意すべきものは、同誌一九一四年一月号の HOW THE "GALILEE" GREW (ガリラヤ丸はどうして出来たのか) という記事の中の次の一文である。(傍点筆者)

我々は最初、(琵琶湖を渡るための) 単なる運搬具としての船(モーターボート)を考えた。しかしそれさえも幻に過ぎないように思えたのである。——なぜなら我々にはそれを買う金も無ければ、適切な船を造る技師もいず、もし船ができてもそれを動かす人もいなかったからである。ところが最初にお金が来た。米国カンザス州ウィチタの A・A・ハイド氏がこの冒険に援助を申出てくれたのだ。この約束に勇気づけられて、我々は西近江の調査旅行に出発したのである(拙訳)

これが真実であれば、モーターボートの寄付のことは少くとも一九一一年三月の調査旅行以前に話があったことになり、それが前記の BEFORE AND AFTER における確信ある表明となったと考えられる。これらから見えて一九一〇年四月のシカゴ大会以降にすでに援助の約束がなされていたことになるが、これはやや無理ではないかと思う。なぜなら先に紹介したハイドとヴォーリズの往復書簡から判断する限り、依然として確固とした約束の状況は見当らないからである。しかし HOW THE "GALILEE" GREW の記事によると、先の西近江調査旅行の結果、湖西には宿屋が少ないことが判り、ランチには少くとも伝道者たちの宿舎を兼ねる大きさと設備を要することになった。「それは以前考えていた計画の拡大と費用の増大をもたらすことになったが、ハイド氏は、それにも応じてくれた。」(傍点筆者) ということであり、これは先の約束説を裏付けている。

結局、ハイドから、どの時点でモーターボートの寄付がヴォーリズに約束され、小切手が渡されたのかは不明であるが、以上の検証によって、少くともエステスパークのみやげとして急に思いつかれたものでないだけは確実となった。またメンソレータムのこと、それより以前から二人の間に交渉があったことが明らかになった訳である。

(3) 「ガラリヤ丸」の建造と進水

ガラリヤ丸は一九一四年(大正三)九月二十六日、滋賀県蒲生郡岡山村(現・近江八幡市舟木町)の湖岸で進水式を挙行した。この日の模様は THE LAUNCHING OF THE "GALLEE MARU" (ガラリヤ丸の進水)としてマスタードシードに特集されている。

以下その要訳を紹介してみたい。

その日は好天で、遠方からの招待客をまずウォーリズとレイカー Raker が駅に出迎え、次の列車で来た客はウォーターハウスと吉田が迎え午後全員が造船所に集合した。式の次第は次の通りであった。

一、讚美歌……………Jesus, Savior, Pilot Me
司会 吉田悦蔵

二、聖書……………ルカによる福音書五・一〜一一

三、経過報告……………W・M・ウォーリズ

四、説教……………牧師 武田猪平

五、祝辞……………郡長

京都YMCA フェルプス氏

八幡町長

岡山村々長

六、献船(琵琶湖の水と共に)……………ベッシーP・ウォーターハウス

七、献船の祈禱……………村田幸一郎

八、テープカット……………千貫ゆき、ミリアム・フェルプス

支索チェーンを繋いであったロープは故有栖川宮待従だったS・田中閣下によって切られた。

九、ガラリヤ丸見学……………一〇人余りで一組のグループ毎に見学、ポウルB・ウォーターハウス船長の歓迎を受ける
進水直後二羽の鳩が放たれ、見物人は至る所に溢れて二時間ほど付近の交通が停止するほどであった。ウォーターハウス船長は

ざっと八〇〇人の群衆を数えたが、もし進水式に行われた運河付近に、もうそれ以上の余地がないということさえなければ、さらに多くの観客が押寄せたに違いなかった。お祝いと祈りを込めたたくさんの手紙や電報が屈き、日本人の招待客には祝い金を持参する人も多かった。(筆者・西村友美共訳)

ヴォーリズは、この進水式を報じる記事の中で、この船を用いて行う伝道キャンペーンに当って、その決意を次のように表明している。

孤立した琵琶湖の西岸(日本のガリラヤ)に福音を伝える夢は間もなく実現する。長く待ち望んで来たその日は遂に来た。我々自身、そしてお互いに、今後きつこうなることを確信したい——それは、ガリラヤ丸はいよいよ伝道キャンペーンに出航の準備が整い、そして行く先々の湖岸で、漁船や網と一緒に、日本のベテロやヨハネ、アンデレヤやヨブを見つけ出し、生けるキリストの靈によって彼らを「人を漁どる者」に変えていくに違いないということ、また湖西の農夫たちにも福音をもたらし、その心に輝きを与えて、彼らを「神の国」の豊かな収獲の「刈入れ人」にするに違いないことである。(拙訳)

このガリラヤ丸は、先述のように、ハイドの寄付により日本で建造された訳であるが、全くの新造船かどうかについては疑問がある。ヴォーリズによれば、モニターフレームはニューアーク(Newark)で購入され、この船のためにフリズビー社(Frisbie)で造られたエンジンと一緒に日本へ送られて来たのであるが、船体を組立てるにあたっては、瀬戸内海の伝道船「福音丸」のビッケル船長(Captain Bickel)の援助があったという。すなわちビッケルはヴォーリズに造船技師(ship-builder)を推薦し、「彼は船大工たちと共に船体を元のものよりさらに完全なものに造り上げた」(28) constructed the hull more perfectly even than the original, とあるからである。このために、その技師は船の長さや安全を増す目的で特別の木材を付け加えたとされている。さらに『失敗者の自叙伝』に、「この船はアメリカ製のランチ一隻を改良したドリー型で」(29) (傍点筆者)とあるのも右の疑問を裏付けていると言えよう。

ウォーリズは兼ねてからこのビッケルの福音丸伝道に共感し接触を持っていたようであるが、これについては後で触れることにする。

ガリラヤ丸の要目は長さ三丈五尺(三五フィート)、幅九尺(九フィート)、約一四トン、速力一二ノットであったとされているが、一尺 \parallel 一m \times 寸として換算すると、船長約一〇・六一m、船幅約二・七三mとなる。「マスタードシード」の記事によれば、船首から順に、ウィンチ付の錨、ガソリン及びオイルタンク、ロッカー、トイレ等があり、船室(キャビン)には四〜六人用シートベッドと折畳み式テーブルが備えられ、その一隅にはオブティムス Opimus 石油ガストープと銅製の流し、それにロッカーの付いたキッチンスペースがあった。このキャビンには採光用天窓と左右四個ずつの舷窓(bathole)があったが、現存の設計図(第1図)を見るとそれが三個ずつとなっている。

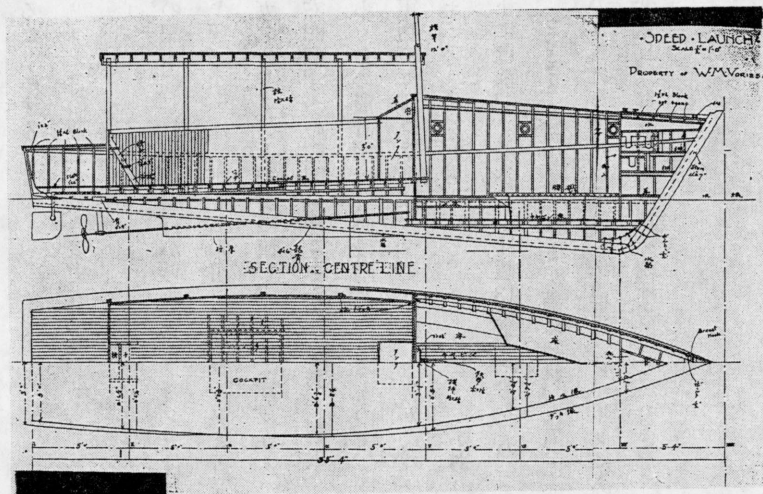
おそらくこの設計図は計画段階におけるもので、船室がせまくまだどこかに日本的なイメージが感じられるが、完成した実物のガリラヤ丸はスマートなアメリカ式のランチであった。(第2図)

キャビンのドアを開けると、コックピットがあり、両側を天幕で覆ったそのスペースには一〇人余りを収容できた。その下には前記フリスビー社製13馬力(公称)のエンジンが置かれていた。なおデッキの上には補助走行用のピボット式(pivoted)折畳みマストが備えられ、必要に応じてこれを立てて帆走することができる仕組みになっていた。

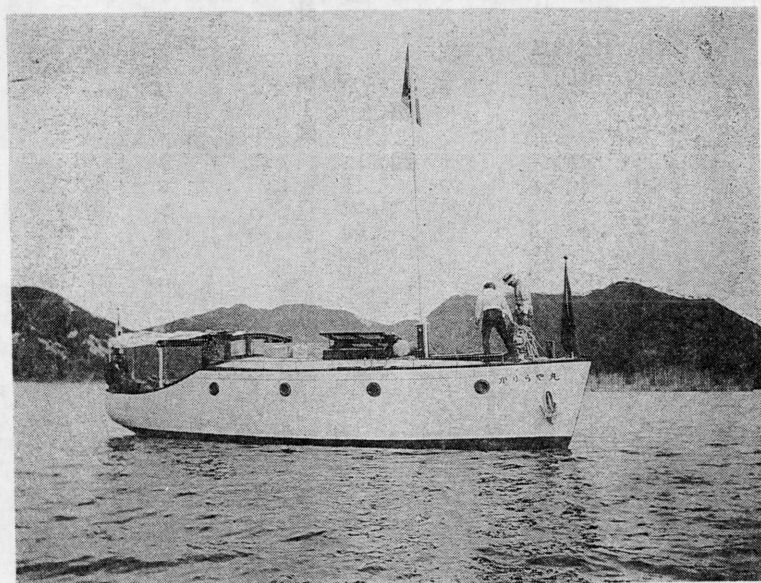
このようにガリラヤ丸は、伝道キャンペーンにあたって単に伝道者たちを運ぶだけでなくその宿舎ともなり、シフトを変えれば継続して伝道を続けることができた。そこでウォーリズは世の中に向かって高らかに次のように宣言している。

ガリラヤ丸は娯楽の船ではなく戦いの船である。それは武装されたクルーザーだ。愛によって、そして真理の大砲によって重武装され、暗黒に対する光の戦いに出動していくのだ。(拙訳)

第1図 「ガリヤ丸」原設計図（実物より船室が狭い）



第2図 初代「ガリヤ丸」（1914—1928）



三、「ガリラヤ丸」による伝道

(1) ビッケル船長と「福音丸」伝道

前節でも少し触れたように、ウォーリズはかねてから「福音丸」伝道のビッケル船長に対し先輩としての敬意と関心を抱いていたように思われる。それは琵琶湖畔の伝道を夢見る彼にとつて、けだし当然のことであつたらう。「私たちは、琵琶湖に伝道船の出現を夢見ていたが、瀬戸内海の福音丸船長ビッケル先生 Captain Bickel」に接して、この夢は、大きくなった」といふ彼の言葉はその間の消息を物語っている。

ビッケル (Luke Washington Bickel 1866—1917) に ついて は、ハリントン (C. K. Harrington) より Captain Bickel of the Inland Sea, 1919 (「鳥々の伝道者ビッケル船長の生涯」) をはじめ、すでに多くの紹介がなされている。

一九一三年(大正二)二月二〇日、前記のようにウォーリズは、ビッケル船長を訪ねて初代の福音丸を見学、二代目の福音丸に乗船して船長夫妻の生活に接し、開拓伝道について論じ合う機会を得た。その結果、開拓伝道の理論や実際について二人の意見は全く一致を見たのである。ウォーリズによれば、このときビッケルの指摘した伝道上の主な留意点は、(一)開拓伝道には地域の人々と十分親しくなること(二)一ヶ所に辛ばう強く伝道し、求道者があつても十年後でなければ授洗しないこと(三)改宗者の数にとらわれるより未来の指導者を得ること、などであつたが、彼はこの先輩との会見によつて、自己の田舎の未開拓地への伝道のやり方に確信を強められた。一九一〇年(明治四三)六月、有馬でのミッションナリー会議におけるビッケルの報告資料には、次の五項目の伝道方法と方針(Rule)が示されている。

- (一)福音丸は他の教派が伝道しているところには行かない。
- (二)福音丸はどの島へ行っても福音が受入れられるまで伝道を続ける。
- (三)然るべき人々には敬意を表するが、福音はすべての階級の、すべての人々のものである。
- (四)福音が受入れられたら、島々を区分し、グループ毎に責任ある定住者を置いて、各グループの指導者とする。
- (五)有給伝道者 (paid worker) の数を限定し、信徒の伝道活動を盛んにする。⁽³⁶⁾

一方、ヴォーリズの「近江ミッション綱領」(PLATFORM OF OMI-MISSION)⁽³⁷⁾の要点は左の通りであった。

- (一)近江の国で教派に関係なく福音を宣伝し、教会は設立せず信徒の団体が経済的独立ができればその撰択する教派に属させる。
- (二)本邦人と外国人の完全な協力を表現する。
- (三)新教諸派により未だ伝道されていない地方に福音を伝え、重複的伝道はしない。
- (四)未来の指導者が出る地方小都市、農漁村に伝道する。
- (五)福音伝道者、指導者の養成。
- (六)禁酒禁煙、貞潔思想向上、婚姻習慣改善、体育衛生の進歩を計り、社会的弱者への運動を含む社会風紀の改善に従事。
- (七)福音伝道の新方法の研究と実験

近江ミッションの場合は単なる福音伝道ではなく、それがもたらす生活及び社会の改善を目指すという当時の Y M C A の思想が含まれているが、ビッケルの方針と共通する所も多く、伝道論に関して二人の意見が一致したというヴォーリズの言葉も肯首できる。

ビッケルは一九一一年(明治四四)大阪で開かれた Central Japan Mission Association の What Has Been Done in Evangelizing One Country District (地方での伝道の働き)と題して講演⁽³⁸⁾し、自らの信仰と福音丸による伝道の方法や経験談を具体的に語っており、その中にもさらにヴォーリズの信仰や伝道論と通じる多くのものを見出すことが

できる。またビッケルの前記の講演を「マスタードシード」に全文掲載したところにも、ヴォーリズのビッケルへの関心の深さを見ることができよう。

ビッケルの福音丸伝道とヴォーリズのガリラヤ丸伝道を比較した場合、言うまでもなく前者が先輩であり、伝道の規模も格段に大きかったが、右に見て来たように伝道の内容と方法においては共通する所が多かった。その他の共通する点としては、まずガリラヤ丸と同様、福音丸も途中で建造し直されたことが挙げられる。小林功芳氏によれば、最初の福音丸は横浜本牧で建造され、全長八五フィート(約二六^三)、船幅一七フィート(約五^三)、八二トンの二本マストの縦帆式帆船であった。一八九九年(明治三二)九月に献船式が行われた。新福音丸は瀬戸内海大崎上島で建造、全長一二二フィート(約三七^三)、船幅二四フィート(約七^三)、一六四トン、主帆以外は横帆で一二〇馬力のエンジンを用意していた。一九一三年(大正二)六月、瀬戸田で献船式を行っている。ビッケルはこれらの二回とも自ら造船監督をつとめたが、その経験に基いてガリラヤ丸の建造に種々助言を与えたものと考えられる。

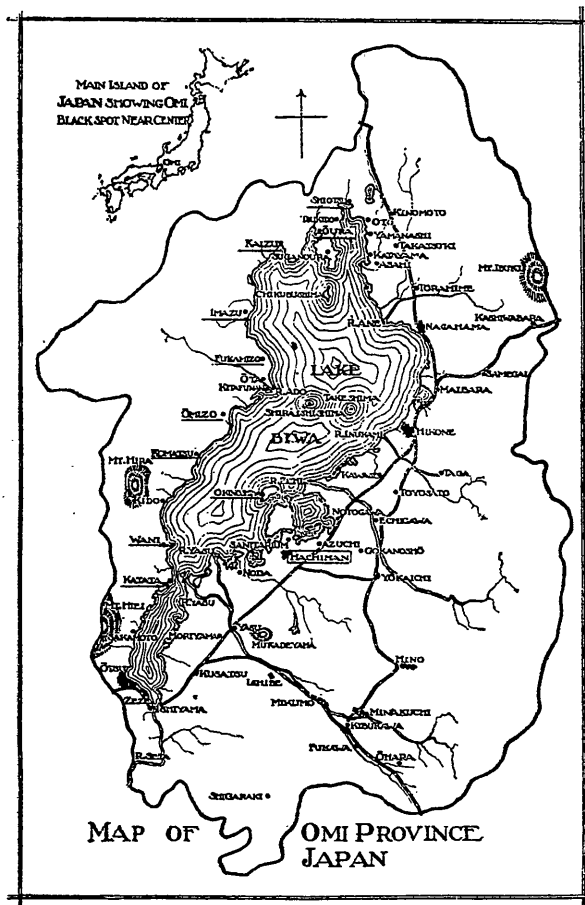
次にビッケルは、昔、ロンドンで出版関係に働いた経験から文書伝道に意を用い、一九〇五年(明治三八)以降「福音丸新報」を発行して島々に福音を宣べ伝えたが、ヴォーリズや吉田らが一九一二年(明治四五)から『湖畔の声』を発行し、トラクト等と共にガリラヤ丸伝道にも使用したことは、それに比肩すべきものであろう。

一九一七年(大正六)、ビッケルは世を去り、後継者となった長男フィリップも間もなく辞任、福音丸は一九二九年(昭和四)二月に売却された。その金で瀬戸田、安下庄、土庄、宮浦に教会堂が建設されたが、ガリラヤ丸も堅田や今津に教会を生み出し、後述するように、一九三九年(昭和一四)に売却後は、その金で八幡町内に伝道隣保事業のための土地が購入されている。⁽⁴¹⁾

(2) 「ガリラヤ丸」による伝道

こうして念願のゴスペルボートは完成したが、当然乗組員が必要となる。そこで船長に指名されたのがウォーターハウスであった。ウォーターハウス⁽⁴²⁾(Paul B. Waterhouse)は一九一二年九月(大正一)に近江ミッションに加入した。彼はプリンストン大学の出身でレスリングの選手でもあり、恵まれた体格の保持者であった。来日後、早稲田大学の英語講師を勤めていたが、一時帰国してハートフォード神学校に学び、同じハートフォードで学んでいたベッシー・ピーク(Bessie O. Peak)と結婚、夫人と共に自給伝道者として再び日本の土を踏んだのである。ベッシーはミズリー州スプリングフィールド出身、大学院で宗教育学を専攻した才色兼備の女性であった。ウォーターハウスの父はカリフォルニア州バサデナ市長を勤めた人であり、ウォーターハウスがヨットの操縦にすぐれていたことからガリラヤ丸の船長として囑目されたのである。しかし湖上の運航には免許が必要なことから旧海軍軍人で有資格者の山本庄之助が運転士(後に船長)、同じく西沢正治が機関士として乗務することになった。また当初ガリラヤ丸に乗って各地の伝道に赴いたエヴァンジェリストはウォーターハウスをはじめ、ヴォーリス、吉田、武田猪平牧師らであり、後には宮家磐夫らに加わった。ウォーターハウスは船長であると共に、伝道者として奮迅の働きを示してミッションの団員たちに深い印象を残したが、一九二三年(大正一二)一二月、一家と共に帰国した。戦後一九五八年(昭和三三)にも来日している。こうして準備は整ったが、湖上の運航の許可がおりるのに手間取り、その間ガリラヤ丸は試運転などを行って待機を余儀なくされていた。その間の様子は TWO DAYS ON THE "GALILEE MARU" (ガリラヤ丸上の二日間)⁽⁴³⁾ 等に詳しく報告されている。後年西沢の回想によれば⁽⁴⁴⁾、ガリラヤ丸は毎週月曜日午後出帆、彦根、長浜、片山、塩津、海津、今津、深清水、大溝、舟木、堅田、雄琴のコースで水曜日夜半から木曜日午前には帰幡したという。当初、艇庫は舟木にあり、西沢はその近くに住んでいたようである。ただし右のコースで舟木が途中に出てくるのは何かの間違いかと

第3図 近江地方の地図 (The Omi Mustard-Seed 裏表紙) 下線はガリラヤ丸伝道の関係地



AREA, 1616 sq. miles; POPULATION, 700,370. *AS OF 1917*
 1 city (OTSU); 1367 towns and villages.
 This is the field in which we are the only resident missionaries.
 OMI MISSION, seeking to evangelize this Province with 40 workers, is
 dependent upon Voluntary Contributions.

思われる。

その頃、近江ミッションでは毎月、例会 The Monthly Conference を開き、県下各地から全員が集ってそれぞれ
 任地の状況を報告することが行われていた。その例会の様子は毎回「MONTHLY REPORT」として「マスタードシ
 ード」に掲載されている。それらの中から「ガリラヤ丸」とその伝道の状況に関する報告を二、三紹介してみよう。
 (第3図) 近江地方の地図参照

艇庫は目下建設中だが、パイル打ちが思わぬ硬い土壌にぶつかり工事がおくれている。このため多少費用がかさむだろう。ガリヤ丸の自由な運行のためには政府の認可が必要。二日間の試運転はきわめて満足なものだったと報告されている。ウォーリーズ氏の昔の教え子を通じて湖西地方との接触点が確保された。

(一九一四年一月七日、例会報告)⁽⁴⁵⁾

大津や大阪へ(陳情に)出かけた結果、ガリヤ丸運行の予備認可が下り、最終的な調整もそう遠くはないと思う。近江以外の牧師や伝道者有志からたくさん献金が来ている。

(一九一五年二月一日、例会報告)⁽⁴⁶⁾

六カ月もの忍耐の末、ようやく正式の航行認可がおりた。これからは何もものにも妨げられることはない。そこでまず教会があり信徒たちがいる東部の湖岸を訪れることが計画されている。それはこの地方のすべてのクリスチャンにこの船を知ってもらい、その使命を頌ち合ってもらうためである。

(一九一五年四月三日、例会報告)⁽⁴⁷⁾

一九日にいよいよ定期の伝道キャーペーンを開始する。その前の一七日には特別に沖ノ島へ航行を試みて上陸。数分のうちに一五人が集まり、約一五分間、驚く村人たちを前にアライアンスミッションのランズトラム(Lundström)牧師が分り易い説教を行った。彼らは静聴し、我らの配布した印刷物を受取った。我らからの八幡への誘いと同時に島民らの心からの招きに応え、再訪を約束して島を離れた。

一九日から二二日は、長浜、大浦へ寄港しながら北へ航行。ウォーターハウス、武田、吉田、そして西沢機関士。この航海の詳細は「ガリヤ丸航海日誌より」NOTES FROM THE LOG OF THE GALILEE MARUに紹介される。吉田さんのコルネット演奏は讚美歌を教えるのに、また群集をひきつけるのに役立った。大浦へは初めてだったので非常に興味深かった。郵便局長のニコデモのような訪問に勇気づけられた。この村は五〇年おくられているようだった。ガリヤ丸はそれを新しい生活へと目醒めさせる「コモドル・ベリーの艦隊」となるかも知れない。

二六日から二九日は八幡から真直ぐ北の大溝へ二度目の航海をした。我らは京都のエピスコパルミッションの小さな教会から分離した信者の群から訪問を要請されていたのであった。我らはいかなる重複的かつ競争的な活動も拒絶した。今回の訪問はその党派争いの調停のためであった。大津(近江唯一の市)を除いて、ここは近江で我々の知る限りミッションの活動が重複して

いる唯一の例である。近江には何百という未伝道地があるのに、この小さな町を四つも五つも異った教派が「思い出したように食い物にする」(spasmodically exploited)のはまことに奇妙なことである。我々はそれらを最初のエビスコパル教会へ統合する手助けをするためにベストを尽すつもりである。

なぜこんな小さな、遠い町にこのような教派のラッシュが起ったのか、多分、三世紀ほど昔、「近江聖人」中江藤樹が生まれた村だと、ガイドブックに紹介されているからだろう。多くのミッション活動は「名所」の審い合ひの上になされるようだ。

(一九一五年五月一日、例会報告)⁽⁴⁸⁾

(筆者・西村共訳)

次に月例報告ではなく、船長として実際伝道に従事したウォーターハウスの NOTES FROM THE LOG OF THE "GALILEE MARU" (ガリラヤ丸航海日誌より)の中から、一部を抄訳しておきたい。これらによって、孤立した保守的な未開拓地の伝道に近江ミッションがどのように取組んでいったかを具体的に知ることができるし、キリスト教受容と土着化の問題にも興味深い示唆を与えてくれるからである。

湖西地区の伝道を通じて分つたのは大浦と大浦川付近の村落が最も後進的かつ保守的でキリスト教を怖れていることだ。他の波止場では老若男女が船を見に出てくるが、ここでは子供しか出てこなかった。その子供たちに日曜学校式にダビデの話をした。夜、一二人の若者と一人の男が闇にまぎれ勇気を出して船にやって来て二時間以上話をしたが、キリスト教に対しては異った先入観を持っているようだった。だがこの村から京都へ勉強に出た若者二人がクリスチャンになり、その一人は週末などに聖書売り歩いてゐる。我々はその父親に会い、息子のあとに続くように促した。

……海津は大浦に次ぐ保守的な土地柄だが、夜二〇人ほどの消防団員が話をききに来た。また彼らと入れ替りに村人一五人が二時間ほど過していった。

深清水の港は村から一マイルほど離れているが、付近に求道者が一人あるので一泊。武田牧師と彼を訪ね、稲刈が終わった頃に集会の召集を頼んだ。船では子供たちが三十人程集まり、その子らへの話がまだ終らないうちに、農繁期にもかゝらず約四〇人の大人が集った。彼らは我々にもっと頻繁に来てほしいと言ひ、夜十時すぎまでいた。そのあと海津から来た男が居残り、自

分は仏教徒だが仏教に満足できないとのことだったので、キリストの力を説明し「ヨハネ伝」のトラクトを渡して海津への再訪を約して別れた。

今津は高島郡の郡都であり、我々はその郡長を訪ねた。彼は日頃からキリスト教に反対し、郡内の小学校長を集めて、校内ではいかなる宗教家にも話をさせないよう通告していた人である。これは明らかに直接私たちを念頭に置いた措置であった。というのは、彼は、私たちが学校で子供たちに話をするときには決してキリスト教を教えたりはしなかったことを知っているが、私たちがキリスト教の伝道者だというだけで我々を閉め出そうとしたからである。しかし私たちは彼の住いが寺の僧房であることを知ったので、もはや彼の敵意にも驚きはしなかった。

木戸小学校のある教師のお蔭で、南船路で集會が開けた。約六〇人の子供と四、五〇人の大人が集まり、吉田とウォーターハウスが話をし喜ばれた。五人の求道者があり、我々の再来を希望した。集會は説経の声が聞こえる寺の建物の中で行った。

堅田では最近劇場で開いた集會で感銘を受けたという人物を訪ねた。彼は衣料店にいますが、以前三年間八幡で小学校教師をしていたという。それは一五年前のことで、当時そこには二、三人のクリスチャンしかいなかった。彼は自宅を日曜学校に開放し、悩みを持つ友人二、三人に改宗を勧めたが、三人共クリスチャンになり、その一人は横浜で伝道者となって、逆に彼に対し信者になることを勧めているという。ところが酒、タバコを止めたくないので、彼自身はまだキリストを受け入れていない。だが私たちが一月から始めるバイブルクラスに自宅を開放してくれることになった。どうか彼が家族と共にキリスト教に導かれるようにと祈る。

今月は初訪問が五ヶ所、再訪問七ヶ所、子供の集會に一、一〇〇人以上、大人は、一〜三時間の集會に二〇〇人以上が集った。一〇人の熱心な求道者には一層の光が与えられた。これらに加え、約五、〇〇〇ページ相当のキリスト教印刷物が配布された。(一九一六年一月)

(筆者・西村共訳)

このようにして、大正時代を通じガリラヤ丸は湖畔各地に福音の種を蒔き続け、当初の計画通り、湖西南部では堅田、同北部では今津を伝道根拠地として確保することに成功した。近江ミッションはこれらを中心として、その付近にさらに伝道が続けていったのである。なお堅田講義所は一九一九年(大正八)、今津基督教会館は一九二二年(大正

一二)に開設され、後にそれぞれキリスト教会となって今日に及んでいる。ただ湖北の塩津、大浦、海津、そして湖西南部の小松、木戸、和邇、雄琴への種蒔きはそういう形では結実を見なかった。

これらの伝道状況の中で意外なことは、各地の小学校の校長や教師たちがかなり協力的で、子供たちへのお話を道徳教育として受入れていることである。一方、各地で仏教徒による妨害に面したことも屢々であった。その各一例ずつを紹介して本章を終りたい。

南小松では校長が児童に話す機会を提供してくれただけでなく、講演者の言ったことを実行するように呼びかけた。

(一九一六年二月)⁽⁵⁰⁾

先月太田村に我々の関心と活動が集中した。仏教徒の我々に対するボイコット運動はさらに高まっている。先頃彼らの反対集会で、京都仏教大学の学生が「エホバの神は妬む神だ。クリスチャンは死んでも神になれないが仏教徒は仏になれる」などと仏教のご利益を延々と説明した。この影響で大人の集会は一〇〜一二人ほどの参加者しかなかった。子供の方は平均四〇人程が集った。村中が今この話題で持ち切りで、毎日誰かが浅見さんに質問に来た。ある人は仏教の僧侶の尊大な態度と、何かと言えは寄付を求める傾向をキリスト教との違いとして指摘した。実はこの時キリスト教排斥運動のための寄付が集められていたのだ。

(一九一七年三月)⁽⁵¹⁾

(西村・筆者共訳)

四、新「ガリラヤ丸」の建造とその後

(1) 新「ガリラヤ丸」の建造と伝道

ガリラヤ丸は、右に見て来たように近江伝道、特に湖西地方の開拓伝道に貢献し、画期的成功をもたらした。だが進水以来一四年間、文字通り東奔西走したこの船は、木造であったこともあって老朽化が進み、一九二八年(昭和三)

長命寺の「船源造船所」で特別検査の結果、予想以上にいたみ方がひどいことが判明した。当然この船の存廃も論議されたが、最初の寄付者ハイドの志も尊重して船体新造が決議され、三千数百円の工費を以て大津市の「桑野造船所」で建造することになった。^(註)当初は七月末に完成の予定であったが、実際進水式が行われたのは同年九月一三日のことである。

この新ガリラヤ丸の要目については、最近、関係資料を発見し得たので、正確に紹介することができる。

船 長 一三・五三 m

船 幅 二・七一 m

最高尺度（船体最低部より最高部まで）

二・九九 m

吃 水 一・〇〇 m（船底鋼板）

積載人員 三二人（うち乗務員三人）

総噸数 一三・七四トン

登簿噸数 七・三三トン

速 力 一一ノット

ガソリン消費量 五ガロン／一時間

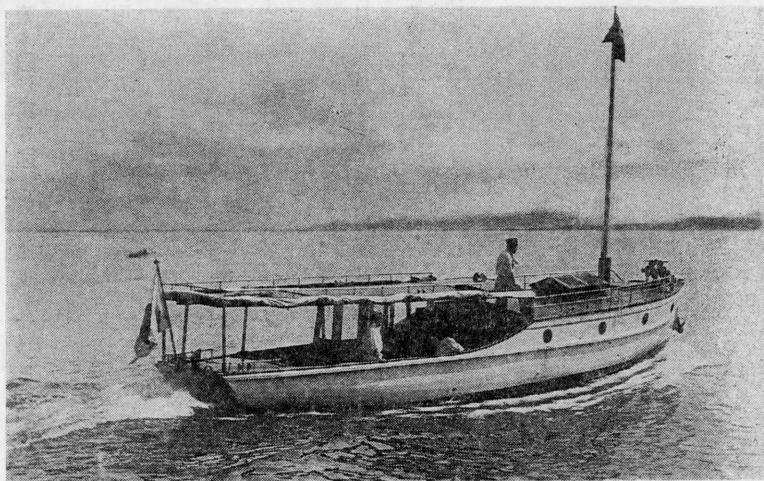
機 関 一三馬力ガソリン発動機（米国コネティカット州ミドルタウン、フリスビーモーター会社製造）

進 水 一九二八年八月

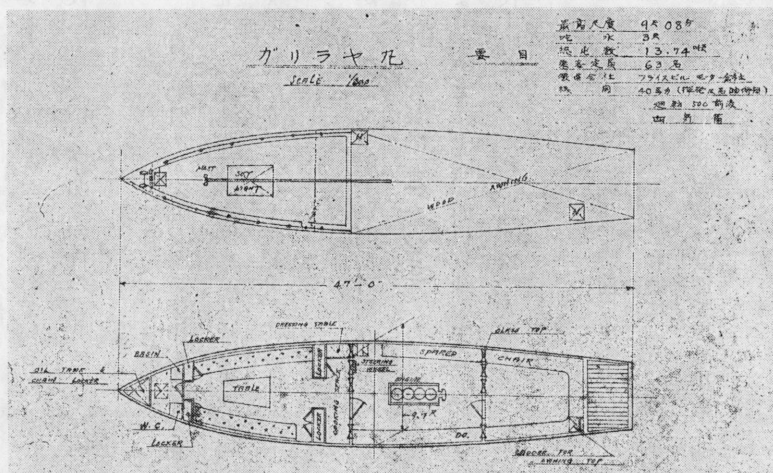
造船完成 一九二八年九月一三日

（大津市桑野造船所に於て）

第4図 二代目、新「ガリラヤ丸」(1928—1939)



第5図 同上 平面図



この二代目「新ガリラヤ丸」は、初代のものに比べると、船長が約3m長くなった以外は構造上ほとんど変りはない。(第4図、第5図)ただ船長が伸びた分重量が増したのか速力が一ノットおそくなっているが、初代ガリラヤ丸のトン数と速度については第一次資料を欠くために厳密な比較はできない。機関は初代のフリスビー社のものをそのまま転用したものと考えられる。

この新ガリラヤ丸による第一回伝道旅行は、進水の翌月、一〇月二七日から二九日まで堅田、雄琴、和邇方面に向けて行われた。そのスタッフは船長山本庄之助、機関士西沢正治、伝道者は宮家磐夫で、アヤツリ人形の一座五人が同行した。その様子は『湖畔の声』に掲載されているが、やや長いので左に要約して紹介してみよう。⁶⁴

一〇月二七日堅田では西村関一牧師の出迎えを受け、そこから大津に向う船上に関係者三五名を迎えて湖南日曜学校教師会を開催したが、その中には膳所教会の矢部喜好牧師、ニッブ宣教師(J. E. Nipp)らもいた。膳所で教師会関係者たちは下船、近江ミッシヨンの一行は船中で夕食を済ませて坂本に上陸、西村牧師を中心に夜の集会を開いた。大人子供一七〇人が集まり立錫の余地もないほどであった。夜十時半頃、それぞれ楽器や人形芝居の道具を持って船に戻り、堅田に着いて一泊した。

翌二八日は堅田教会で朝礼拝、日曜学校には三〇名余が集った。船は雄琴に向い、駅前で集会を持ち、トラクトやメンソレータム(現・メントラム)のサンプルを配布した。いったん堅田に戻り午後は和邇に向う。浜辺で子供の集会を開いて三、四〇人が集まる。路傍伝道を済ませて再び堅田に戻り、堅田(基督教)会館で夜の集会を開く。「ダビデとゴリアテ」などの人形劇に子供たちは大喜びだった。

二九日朝、堅田を出発して長命寺に帰港。今回の伝道旅行の航海延時間は五時間半、集会七回、延人数約六〇〇人

であった。

なおこの旅行に加わったアヤツリ人形一座の一人が記した印象記「木偶でゴリアテに聴く」もあり、それは次の文で終っている。

僕の言いたいことは、ゴリアテが云ってくれました。今度の航海で痛感したことは、幾多の辛酸をなめて、尚ほ更新活躍するガリラヤ丸と、その担当者諸兄の生命に徹せる働き振り。

堅田を中心として、その近傍になり響く太鼓の音と、高く掲げられた空色の旗（注・近江ミッションの旗）と奮然たるN牧師（西村関一）の伝道。さては我等の小さいながらの団結の甘美にして香しき捧げもの。（以下略）

一方、今津方面への伝道の様子を伝えるものとしてハインス夫人 (Mrs. W. E. Hines) による A GALILEE TOUR (ガリラヤ丸の旅) がある。彼女は建築家であった夫ハインスと共に宣教師として数年間中国に伝道し、一九二八年から三〇年まで近江ミッションに参加した人である。

次にその一部を抄訳する。

（この今津伝道は）土曜日の午後、宮家氏の巧みなお話による子供会が始った。吉田氏は夕方の大人の集会で語った。日曜日の朝、宮家氏が再び子供たちに話し、ハインスはサムエルの話をした。私も歌やゲームを教えた。朝の礼拝は吉田氏が担当、夕方には一里ほど離れたある信徒の家（注・深清水だと思われる）で集会をし、同志社の竹中（勝男）氏も加わった。同氏は今津での夕拝でも力強く語った。

月曜の午後、ハインスは今津中学（現・滋賀県立高島高等学校）で講演、私は歌唱した。また生徒たちに書取り (Dictation) を試み、中には優れた生徒がいるのに感心した。校長に大変感謝され和菓子のお土産をもらった。帰りの船は揺れたが、夕方長命寺に着いてほっとした。だがこの旅でできた友人のことを思い出し、また平和と喜び、真のクリスマスの意味をまだ知らずに

いる多くの人々のことを思うと心が重い。(筆者抄訳)

(2) 新「ガリラヤ丸」の売却

以上見てきたように、二代に亘るガリラヤ丸とその伝道活動は、「神の国」に豊かな収獲をもたらした。しかし一九三七年(昭和一二)七月、日中戦争が始まると、ガソリンやオイルの入手が次第に困難になり、同年一〇月、ガリラヤ丸は遂に繋船のやむなきに至ったのである。そして翌一九三八年(昭和二三)四月一二日、近江兄弟社(旧・近江ミッション)庶務部松山嘉蔵から、神戸市神戸区京町七二、クレセントビル「合資会社大村甚三郎商店」に、ガリラヤ丸の性能表、凶面、写真等が送付されている。これが売却のための資料であることは明らかであるが、その意志決定に至るまでの社内動きについては翌年、昭和一四年五月一五日の実行委員会報告(同六月七日付「近江兄弟社月報」17)に「ガリラヤ丸売却の件」とある以外は詳かではない。四月一三日には大村商店から折返し「油ノ消費量御記入無之……コレが一番ニ重要ノ点ノ由ニツキ」至急知らせるようにとの葉書が発せられ、松山からは一四日付で「油消費量一時間約五ガロンに有之候⁵⁸」との返事が出されている。

これに対し大村商店からは、四月一五日付で「扱買手は当地三菱倉庫に有之候処同社技師貴地へ罷出で一度実地運転して見度しとの事に付何日頃罷出で候はば御都合宜敷候や……」と問合せて来た。松山は同一八日付の返書で本月二日もしくは二二日がよいと指定しているが、その際、先日の「性能書」で「三馬力とあるが、それは公称で実際は四〇馬力であると付言している。それは事実であり、またガリラヤ丸を少しでも有利に売却する意向を示すものと言えよう。

大村商店からは四月一九日付で「御来示通り来る廿一日当地三菱倉庫会社より青木氏外二名貴地へ実地試験のため参られ可申候」と連絡があり、事実、四月二二日、青木氏他二名が来幡した。一行は長命寺艇庫においてガリラヤ丸

を点検、湖上で約三〇分間の試運転を行っている。午後社内見学の後、列車で大津に赴き桑野造船所で設計図を求めたが得られず、また搬送のためにインクライン水門口を調査したが京都に至る途中に決壊箇所があり、水上の廻航は無理なことが分った。さらに浜大津駅所有の湖岸起重機の吊上能力が三トンであることも判明し、結局神戸へガリラヤ丸を輸送するには、人力で引上げて貨車に積むか牛車で運ぶしかないとの結論が出されたのである。⁽⁶²⁾

その頃、四月末日までの休船(停船)期限が迫って来た。そこで松山は、大阪市港区六条通一丁目二「小寺海事代書事務所」(大阪市北区中之島六丁目、大阪逓信局海事部構内常務代書)に対し、一〇月まで休船期間延長の手続方を依頼し、二日にもその催促を送っている。小寺からは、五月三日付でガリラヤ丸は営利目的ではなく布教または遊覧用の船であるから、万一また休船延長のこともあるかと考え、無期延期の申請書を作成し、それは四月三〇日に受理されたとの回答が寄せられた。翌日、松山はそれに感謝すると共に休船許可証について問合わせ、小寺からは、その必要はなく、もし再び船を使用する時には検査を受ければよい。検査係長がその辺の事情はよく承知しているとの回答が五月五日付で来ている。以上のようなやり取りの結果、大村商店を通じた売却交渉と小寺海事事務所を経由した繋船期間延長の件は一応納まったのである。

一九三九年(昭和一四)四月一八日、今度は大阪市北区宗是町大阪ビル「富士澤商会」が仲介に立ち、「大阪商船株式会社」工務課技師児玉鏡平が来幡して長命寺艇庫でガリラヤ丸の实地検分を行った。七月一九日付児玉の報告書には、本船は一ケ年以上使用していないが「形体機械共保存宜シキヲ得、現在最上ノ状態ニアリ……(ただし)船幅が長サニ比シ狭ク港内ニ於ケル頻繁ナル発着操縦ニハ稍ヤ困難ト考ヘラル。……用途ハ船客送迎用ニ適スベク、海陸連絡用トシテハ余リ大型過ギル嫌アリ」との判断が示されている。児玉はさらに、もし当社で使用するなら艇内設備改造費最低四千元、検査修繕費千円を要するから五千元以下の価格で購入することができないならむしろ新造の方が

よい。つまり大阪渡しで最高価格五千元が適当、との結論を出した。富士澤商会は七月二〇日付で右の報告書を送付すると共に、評価が安いので困惑しているが、さらに交渉を進める旨の連絡を近江に伝えて来た。しかしこの話は、結局成立には至らなかつたようである。

ところが、同年九月二八日には、松山名で、今回ガリラヤ丸を売却することになったので、その手続について知らせてほしい旨の文書が小寺海事代願事務所に出されている。この段階で売却の相手は明らかにはされていないが、一月一七日に、大津市仲保町「桑野造船所」からガリラヤ丸廻航の見積書が送られて来ているところを見ると、その間にどこかの会社との間に売買の話がまとまり、近江兄弟社からは小寺事務所を通じてすでに廻航申請が大阪通信局海事部宛に提出されていたものと考えられる。

小寺からの一二月一日書簡では、通信局の意向として「永年繋船シテ居ルノデアルカラ臨検セナケレバ(廻船のことは)認可出来ヌ等ノ問題起リ……」⁽⁶⁵⁾ 当時の検査官も代替りしていることでもあり検査もやむを得まいと伝えて来た。また一月二日にはその「大阪通信局海事部」より吉田悦蔵宛に「汽船ガリラヤ丸繋船届出ニ関スル件」⁽⁶⁶⁾として、昭和二年一〇月二日以来、相当期間を経過しているので新たに繋船場所と期間を届出るようにと督促して来た。先に述べた小寺のコメントの通りになった訳である。

一方、一二月五日には、小寺からガリラヤ丸の回航認可がおりたと通知があり、回航認可証書、検査証書、指定書を同封して来た。このうち回航認可書のみは返書を要するとなったが、それが遅延していたようで、海事部より訊問もあり至急返書するようにとの催促が二月一五日付で松山に送られている。

右のような経過で廻航のことは決ったが、肝心の売却の相手はだれであったのか。これまでの文書では明らかにできなかつたが、それは西宮市本町三二「辰馬汽船株式会社」⁽⁶⁷⁾であった。

辰馬汽船は、灘の銘酒「白鹿」の醸造元辰馬家に始まる。白鹿の醸造は一六六二(寛文二)からとされ、一八一八年(文政元)には年間一、五〇〇樽を江戸に積出していたと言われている。当時の他の酒造家と同じく風帆船(和船)を持ち、運送業を兼ねていたのである。一八八五年(明治一八)「辰馬回漕店」を設立、幾多の変遷を経て一九〇九年(明治四二)、「辰馬汽船合資会社」となり、一九一六年(大正六)に「辰馬汽船株式会社」が設立された。昭和に入って外国航路の貨物船を多数擁する有力汽船会社に成長し一九三七年(昭和一二)には辰馬グループが形成されその一員となった。翌一九三八年山県勝見が社長に就任、その頃、海運界は戦時体制へ向かっていった。ガリラヤ丸が同社に売却されたのはちょうどそのような時代のことであった。なお戦後一九四七年(昭和二二)辰馬汽船は「新日本汽船株式会社」と改称、さらに山下汽船株式会社と合併して「山下新日本汽船株式会社」となり今日に至っている。

一九三九年(昭和一四)一月二二日、ガリラヤ丸船主「近江基督教慈善教化財団」(現・財団法人近江兄弟社)と辰馬汽船株式会社取締役社長山縣勝見との間に(第6図)のような「売買契約書」が取り交された。これによって遂にガリラヤ丸は近江ミッションの手を離れたのである。

一月三十一日、売主吉田悦蔵名で「金壹万五百円也」の売渡代金「領収証」が出され、仲介にあたった「富士澤商會は手数料「金五百式拾五円」(五歩)を受取った。ただこの富士澤商會の領収書の宛先が「ヴォーリズ建築事務所」となっていることと、右の売買契約書の売主が「大川内深」となっているのはなぜであろうか。それは当時「ヴォーリズ大阪建築事務所」が大阪市西区土佐堀通一丁目大同ビル内にあり、この売買の手續きに関して近江の指示を受けて動いていたものと考えるのが至当であろう。大川内はその事務所に働く建築家の一人であったが、「財団代表」代理となるような立場にいた人とは考えられず、やはり疑問が残る。

それにしてもガリラヤ丸はどのようにして神戸へ廻航されたのであろうか。二月三〇日付で桑野造船所が出した領収書がそれを解明してくれる。すなわちその領収書には「大津湖上より大阪天神橋詰迄」の運搬費六百円、そこか

右契約書は、作成署名各調印の上各自普通通分有之

昭和四年拾貳月 拾貳日

買主 賣主

江原嘉蔵 大川内保

山縣 見

此項は運賃費一切賣主に於て負擔ノコト

本船ノ運賃及其他ノ物品ハ昭和拾四年拾貳月拾貳日下

見ニト共ニ現在在表ノ儘一切ノ附屬品共買主ニ引渡シ

本船引渡以前三箇月原因ノ如何ヲ不問沈没、喪失、火

災、墮落申渡候其他不可抗力ニヨリ契約履行不可能ニ

至リタル時ハ本契約ハ當然無効ノコト

凡所有權移轉手續ハ一切ヲナス

賣主ハ買主ノ委任ニヨリ所有權移轉手續ハ一切ヲナス

昭和四年拾貳月 拾貳日

買 買 約 書

「ガリラヤ丸」ノ船主江原嘉蔵、辰馬汽船株式會社ノ間ニ本船ノ買買契約ヲ左ノ通り締結ス

「ガリラヤ丸」

昭和四年九月拾壹日

一三噸七四

近 江 六

買 價 格

金壹萬五百圓也

本契約調印終了ノトキ金貳千圓也ヲ手掛金トシテ支拂

ト殘金ハ權利結讞後共ニ本船受渡後支拂モノトス

本契約不實行トナリタルトキハ前記手續金ハ倍數四千

圓也ヲ買主ニ返金ノコト

本船引渡手續

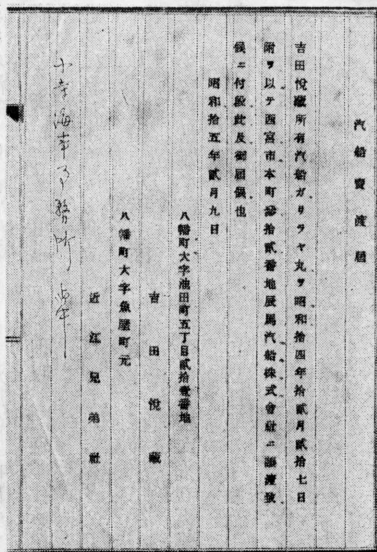
神戶港ニ於テ引渡シ

第6圖 「ガリラヤ丸」売買契約書

ら「天保山渡船場迄」の曳行賃五円、さらに「神戸港オリエンタルホテル前迄」の曳行賃四〇円、合計六四五円とあるところから見て、大阪から大阪までは陸路、大阪からは水路をとったものと考えられ、先に述べた三菱倉庫青木氏らの下見調査の結論を裏付けるものとなっている。なお廻航の期日については、一二月二日以降と思われ、その処理のため牧師内炭政三、大原義雄、滝川健次の三名が大津桑野造船所に出張し、祈禱の裡にガリラヤ丸の出立を見送った。

一九四〇年（昭和一五）二月七日、吉田悦蔵は滋賀県知事平敏孝、八幡町長岡田正芳に（第7圖）のような同文の「汽船売渡届」を提出した。

松山嘉蔵は庶務部担当者として最後までこの売却業務に携わった。小寺から二月六日付で、ガリラヤ丸がすでに神戸に到着しているのなら「回航認可証」を早く返送するようにとの催促を受けた松山は、ヴォーリズ大阪建築事務所の前記大川内深に調査を依頼、大川内からは、その手続きについては辰馬汽船の方ですでに済んでいるとの報告が来



第7図 「ガリラヤ丸」売渡届

「ガリラヤ丸」を手離さざるを得なかった「近江ミッション」の苦衷が窺知されよう。

大正三年以来ながらく琵琶湖上に活動した傳道船ガリラヤ丸はその使命を果たし湖上から姿を消す事になりました。湖畔に鐵道の便もなく、會館もなかつた時代近江傳道の草分け時代から、近江兄弟社名物の一つ福音船ガリラヤ丸は、二十七年間、湖畔にキリストの福音を傳へたものでしたが、今や湖畔に會館も立ち、交通の便ひらけ、船漸く老ひ、ガソリンもない此頃では、もはやガリラヤ丸もその使命を終つたものとして賣却され、その賣上を以て、新たに基督教隣保セツルメントを設ける事になりました。舊臘十二月二十二日祈りの中に船は大津に上陸しました。思ひ出深きこの船に対する皆様のこれまでの御禱援を感謝致します。

(3) 「ガリラヤ丸」のその後
 辰馬汽船に売却されたガリラヤ丸は、その後どのような運命をたどつたのか。一柳満喜子(ウオーリス)夫人の甥に当

た。この事からも、先述の通り、近江の指示で大坂建築事務所が動いたと見る推測が妥当なものであることが理解されよう。松山は二月九日、大川内からの報告に基き、謝意を含めてその報告の趣旨を小寺に返答し、ようやくこの任務から解放された。吉田も小寺宛に「汽船売渡届」を提出したが、それは二月九日のことであつた。(第7図)

昭和一五年二月号『湖畔の声』のグラビアページには「ガリラヤ丸有難う!!」と題して、数葉の写真と共に次のような送別の記事が掲げられた。(20)

る元三光汽船常務取締役一柳末幸氏は、「ガリラヤ丸のその後」という一文でその様子を明らかにされている。それによると、ガリラヤ丸は辰馬汽船で「たつ丸」と改名され、神戸港の通船として使用されていたが、戦後の混乱の中で、港内の舳溜りに繋留されたまま忘れられていたのである。当時、辰馬汽船社員であった吉田文吾氏は、学生時代に国際キャンプに参加して近江兄弟社を見学、ガリラヤ丸に乗せてもらったことがあり、戦後、社員として辰馬汽船の残存社船を調査中、たまたま神戸港の舳溜りに繋がれていた「たつ丸」（ガリラヤ丸）を発見、以後その生涯を追跡した後日譚を一柳氏に語ったのである。筆者は本研究のため一柳氏の紹介で吉田氏に出会い、さらにその紹介で関係会社からも話を伺い参考資料を入手することが出来た。以下、それらに基づいて「ガリラヤ丸のその後」をたどってみたい。

一九四七、八年頃（昭和二二、二三）、「たつ丸」（ガリラヤ丸）は、辰馬汽船所屬のまま占部造船という会社に貸出された。占部造船は戦時中大阪から因島へ移り、昭和二五年、社名を山陽造船と改めたが間もなく経営が破綻、新日本汽船（旧・辰馬汽船）と日立造船の共同出資で田熊造船という第二会社設立された。昭和四四年、山陽造船は債務を完済して逆に田熊造船を吸収、同時に社名を田熊造船と改めるといふ複雑な経過をたどる。そして、その田熊造船は新日本汽船と日立造船の話合いの結果、日立造船の關係会社に組み入れられることになったのである。

一方、昭和一九年、瀬戸田船渠と在神戸二社が合併して設立された瀬戸田造船は順調に発展を続けたが、昭和四二年に経営難に陥り、日立造船の支援により再建された。そして昭和四七年、田熊造船を吸収する形で対等合併、新たに内海造船が設立され、日立造船の子会社として今日に至っている。このような造船会社の経営の浮沈と系列化の動きは、当時のきびしいわが国造船界の状況をそのまま物語っていると言えよう。

さて「たつ丸」は、右のような経緯の中で占部造船から山陽造船を経て田熊造船の借り船となり、尾道と因島工場間の来客送迎用に使用されていた。昭和二九年台風で一部を破損したが同社で修理、翌三〇年には新日本汽船から田

熊造船が船を買い受け、例のフリスビーエンジンはグラマンの中古品に取り換えられたという。⁽⁷⁴⁾

当時の日立造船株式会社松原與三松社長は、戦後日本経済復興の一翼を担った造船輸出の功労者であるが、仕事を趣味とし、また麻雀を愛好した人であった。⁽⁷⁵⁾ この松原社長は自社の因島工場を視察する際には、系列下の田熊造船が所有する「たつ丸」を愛用、船室で麻雀を楽しんだと言われている。⁽⁷⁶⁾

一九六六年（昭和四一）一二月、一九二八年（昭和三）の建造以来、長い年月を経てさすがに老朽化した「たつ丸」（ガリラヤ丸）は瀬戸内の平山金属に売渡されて解体、⁽⁷⁷⁾ 三八年に亘るその生涯を閉じた。

五、おわりに

あらためて言うまでもなく、ガリラヤ丸は木材、金属その他の物質から成る建造物であり、船という形の輸送道具 conveyor あるいは手段 means に過ぎなかつた。だが二代五二年間に及ぶその生涯をたどるとき、そこには人の一生にも比すべき運命の起伏があつたことに思いを至さざるを得ない。特に戦争によって大きく運命が変えられ、琵琶湖から神戸港へ、さらに瀬戸内へと移されて、そこで生涯を終つたことには一抹の哀感を禁じ得ないものがある。だがビッケルの「福音丸」が死してなおいくつかの教会を残したように、「ガリラヤ丸」もまた、その働きで教会等を生み出したばかりでなく、死して（売られた金で）「次の伝道地のために相当広い土地を購入」し、「二度の恩沢を、私たちにもたらしてくれたことになる」⁽⁷⁸⁾ とヴォーリスから感謝のことは与えられている。

ではヴォーリスにとって、さらに近代日本におけるキリスト教受容の観点から見て、ガリラヤ丸とその伝道はどのような評価されるべきものであろうか。それには二つの観点があると考えられる。まず第一はそれが近江伝道におい

てはそれまでほとんど未開拓であった湖西地方への伝道を可能にし、見るべき実績をあげたことである。交通や通信が未だ十分に発達していなかった大正から昭和の初めの頃に、宿泊設備付ランチで琵琶湖を横断し、直接西近江に伝道するという奇抜な発想は、ヴォーリズ以外には思いもつかないことであつたらう。彼の理想が近江に「神の国」をつくることであつたことから考えると、もしガリラヤ丸がなければ、その理想は近江の東半分にしかなかったことになる。さらにヴォーリズの考えた理想郷のモデルが近江八幡以外に、ガリラヤ丸伝道の結果として今津にも実現したことから見ても、その意義は大きかつたと言わなければならない。第二に、ビッケルの福音丸の影響があつたと言え、それに次ぐ独自の福音船伝道を実現した功績も伝道史上に記録されるべきものであると言えよう、当時は船が湖岸に着くだけで人が集つたが、そうした文明的落差の持つ有利さがあつたことも否定できない。だが、ただそれだけなら物珍しさはすぐ消えてしまう。彼らはキリストの福音とそれに根ざした新しい思想と生活、文化をもたらし、それらは種々の抵抗や妨害に遭いながらもやがて人々に受容され、序々に根づいていったのである。ガリラヤ丸とその伝道は右の二つの観点から近代日本プロテスタント史上に記憶されるものと言えよう。

右の二つの意味からもヴォーリズ研究におけるガリラヤ丸伝道の位置づけは、先に述べた「神の国」のイデア実現という彼の生涯をかけた事業の重要な部分を担うものと言つても過言ではなからう。

かくしてガリラヤ丸はその使命を終り、近代日本プロテスタント史の一齣を過ぎ去つていったが、あの人形劇一座の中の一人が書き残したように「幾多の辛酸をなめて、尚更新活躍するガリラヤ丸と、その担当者諸兄の生命に徹せる働き振り」は永遠に憶えられるであらうし、「高く掲げられた空色の旗」はいつの世にも降ろしてはならないものである。

それがガリラヤ丸が我々に残した課題なのである。

注

- (1) 拙著『近江に神の国をーW・メレル・ヴォーリス』(近江兄弟社湖声社、一九八六年)
- (2) 拙稿「W・M・ヴォーリスの思想構造」『W・M・ヴォーリスの経済思想』「W・M・ヴォーリスの商業学校教師時代」(『キリスト教社会問題研究』第三〇号、第三一号、第三三号、同志社大学人文科学研究所、一九八二年、八三年、八五年)、その他。
- (3) W. Merrell Vories: INTO WEST OMI (The Omi Mustard-Seed, Vol. 5, No. 2, THE OMI MISSION, May, 1911) p. 27.
- (4) *ibid.* pp. 27—30
- (5) *ibid.* p. 28
- (6) *ibid.* p. 30
- (7) *ibid.*, 新約聖書「ルカによる福音書」一〇・三〇—三七。
- (8) ハンデルの生涯と人物をめぐって W. M. Vories, THE DONOR OF THE “GALILEE MARU”, (The Omi Mustard-Seed, Vol. 8, No. 6, Nov., 1914) pp. 130—131, メレル・ヴォーリス「故・H・H・ハンデル氏の追憶」(『湖畔の声』第二一六八号、一九三五年)一六一—七二頁、吉田悦蔵「ハンデル翁を語る」(同、第二七〇号、一九三五年)四〇—四三ページその他を参照。
- (9) 新約聖書「マタイによる福音書」六・三三。
- (10) 吉田「ハンデル翁を語る」(前掲)四〇ページ。
- (11) 一柳米来留『失敗者の自叙伝』(近江兄弟社湖声社、昭和五五年)二五〇—二五二ページ。
- (12) 吉田悦蔵『近江の兄弟』(近江兄弟社、昭和四四年)一三三—一三六ページ。
- (13) 沖野崋三郎『吉田悦蔵伝』(近江兄弟社、昭和一九年)一一九ページ。
- (14) A. A. Hyde's Letter to Mrs. John Vories (March 20, 1913).
- (15) A. A. Hyde's Letter to Mr. Wm. M. Vories (April 7, 1913).
- (16) A. A. Hyde's Letter to Mr. Wm. M. Vories (April, 1913).
- (17) A. A. Hyde's Letter to Mr. W. M. Vories (10/27/13).
- (18) W. M. Vories's Letter to Mr. A. A. Hyde (November 6, 1913).

- (17) A. A. Hyde's Letter to Mr. W. M. Vorles (Nov. 13, 1913).
- (18) Vorles: BEFORE AND AFTER (*The Oni Mustard-Seed*, Vol. 6, No. 4, July 1912.) p. 72.
- (19) *ibid.*, p. 73.
- (20) *ibid.*, p. 74.
- (21) Vorles: HOW THE "GALILEE" GREW (op. cit. Vol. 8, No. 6, Nov. 1914.) p. 121.
- (22) *ibid.*, p. 122.
- (23) Vorles: THE LAUNCHING OF THE "GALILEE MARU", op. cit. pp. 115—120.
- (24) Vorles: HOW THE "GALILEE" GREW, op. cit. pp. 123—124.
- (25) *ibid.*, p. 122.
- (26) *ibid.*
- (27) 一柳米米留『失敗者の自叙伝』(前掲)二六三ページ。
- (28) Vorles: op. cit. pp. 122—123.
- (29) *ibid.*, p. 123.
- (30) 一柳、前掲書、二六二ページ。
- (31) 同右、二四七ページ。
- (32) 同右、二四八ページ。
- (33) GLEANINGS: Vol. 5, No. 2, December 1898, p. 3. 正回年一〇月一五日迄道船(福音丸)の建造契約が結ばれたこと、マケンの手紙が掲載されたこと、毎号のほうびマケンの記事、手紙、金銀のレポーター等がのめられたこと。
- (34) Luke W. Bickel: THE MISSION SHIP "FUKUIN MARU" (Report of the Conference Arima, June 5—9, 1910) pp. 24—26.
- (35) 拙稿「M・W・ウァーリスの思想轉換」三三五—三三六ページ。
- (36) WHAT HAS BEEN DONE IN EVANGELIZING ONE COUNTRY DISTRICT (A Report of a Talk by Capt. L. W. Bickel of the "FUKUIN MARU") (*The Oni Mustard-Seed*, Vol. 5, No. 2, May 1911), pp. 19—26.
- (37) 小林功芳「福音丸船長「マケン」(『科学人』) 頁 8、関東学院大学工学部教養学舎、昭和五四年(一九一五)二〇—二二頁

- ーシ。
- (40) 同右、二三ページ及び『日本キリシタン宣教百年史』四六ページ。
 - (41) 一柳 前掲書、二六七ページ、『湖畔の声』(第三二八号、昭和十五年六月)四〇ページ。
 - (42) 『湖畔の声』(第三号、大正一年九月)一九ページ、「近江兄弟社60年史(草稿)」第五分冊、二五—二八ページ。Vories: OUR NEW WORKERS (*The Omi Mustard-Seed*, Vol. 6, No. 5 Oct. 1912) pp. 83—84.
 - (43) TWO DAYS ON THE "GALILEE MARU" (*The Omi Mustard-Seed*, Vol. 8, No. 7, Dec. 1914.) pp. 148—149.
 - (44) 『湖畔の声』(第六十三号、昭和四年八月)一四ページ。
 - (45) MONTHLY REPORT, (*The Omi Mustard-Seed*, Vol. 8, No. 7, Dec. 1914.) p. 150.
 - (46) op. cit., (Vol. 8, No. 10, March 1915) p. 231.
 - (47) op. cit., (Vol. 9, No. 2, May 1915) pp. 33—34.
 - (48) op. cit., (Vol. 9, No. 3, June 1915) pp. 61—62.
 - (49) Paul B. Waterhouse: NOTES FROM THE LOG OF THE "GALILEE MARU", *The Omi Mustard-Seed*, (Vol. 9, No. 8, Jan. 1916) pp. 203—206.
 - (50) op. cit., (Vol. 9, No. 9, Feb. 1916) p. 233.
 - (51) op. cit., (Vol. 10, No. 10, March 1917) p. 280.
 - (52) 『湖畔の声』(第一八五号、昭和三年七月)三二ページ。
 - (53) 「第五五船鑑札(滋賀県)」(昭和九年六月一日)他文書。
 - (54) 宮家磐夫「ガリラヤ丸伝道旅行記」(『湖畔の声』第一九〇号、昭和三年十二月)三三—三五ページ。
 - (55) 河野徳恵「木偶ヨリアテを職へ」(『湖畔の声』同右)三五ページ。
 - (56) Mrs. W. E. Hines: A "GALILEE" TOUR (*The Omi Mustard-Seed*, Vol. 22, No. 7, 8, 9, Jan.—Mar. 1928) pp. 133—135.
 - (57) 「大村甚三郎商店葉書」(近江兄弟社本部松山嘉蔵宛、昭和十三年四月一三日)
 - (58) 「松山発文書」(大村甚三郎宛、昭和十三年四月一四日)
 - (59) 「大村甚三郎商店発文書」(松山嘉蔵宛、昭和十三年四月一五日)

- (60) ガリラヤ丸青焼図面には「機関四〇馬力（揮発及石油併用）、廻転五〇〇前後、四気筒」と記入されている。
- (61) 「大村甚三郎商店発文書」（松山嘉蔵宛、昭和十三年四月一九日）
- (62) 「ガリラヤ丸売却交渉」其ノ三、（大橋寛政メモ、昭和十三年四月）
- (63) 児玉鎌平「モーターボート現場下見報告」（富士澤商会宛、昭和十四年七月一九日）
- (64) 昭和十四年一月二日、辰馬汽船株式会社常務が来社しており、この折に同社への売却が確定したものと考えられる。「近江兄弟社月報」23（昭和十四年二月八日）。
- (65) 「小寺海事代理事務所発文書」（近江兄弟社宛、昭和十四年二月一日）
- (66) 「大阪通信局海事部発第二五号文書」（吉田悦蔵宛、昭和十四年一月二日）
- (67) 「社史——合併より十五年」（山下新日本汽船株式会社、昭和十五年六月）三八七—四二七、四四二—四四六、四六五—四六八、四八四—四八八ページ。
- (68) 「ヴォーリズ建築事務所主要所員人脈譜」（『日本の建築明治大正昭和』内、三省堂、昭和五四年）一六七ページ。出典は山形政昭「近江兄弟社を中心に残るW・M・ヴォーリズの建築活動資料の調査報告」（『日本建築学会近畿支部研究報告集』昭和五二年）四八二ページ。
- (69) 「汽船売渡届」（小寺海事事務所宛、吉田悦蔵・近江兄弟社、昭和十五年二月九日）
- (70) 「湖畔の声」（第三二四号、昭和十五年二月）
- (71) 一柳末幸「ガリラヤ丸のその後」（『湖畔の声』第七六四号、昭和五五年一〇月）六一七ページ。
- (72) 一柳、同右。
- (73) 『日立造船百年史』（日立造船株式会社、昭和六〇年）六一四—六一六ページ。これに関しては、同社総務部石井文隆氏による。
- (74) 一柳末幸、同右。
- (75) 『日立造船百年史』（前掲）七六〇ページ。
- (76) 一柳末幸、同右。
- (77) 一柳末幸、同右。平山金属備は現在、尾道市新浜町にあることが判明した。
- (78) 一柳米来留『失敗者の自叙伝』二六七ページ。

- (79) 一柳米来留『失敗者の自叙伝』二六六ページ。
- (80) 一柳米来留「近江兄弟社の根本主義」(『近江兄弟社報』第八号、一九五四年)一ページ。
- (81) 『湖畔の声』(第一九〇号、昭和三年十二月)三五ページ。
- (82) 同右。